
去る一昨年の冬。

高校三年次の私、神宮茜は、交通事故に見舞われ記憶喪失になった——らしかった。担当医を名乗る男から、そう説明された。無機質な病室の真つ白なベッドの上。何の実感も湧かなかった。記憶を持たない私は彼の言を信じるほかない。同乗していた両親は即死だったということ。他に身寄りのない私は国に引き取られるということ。とある国立大学に入学予定の私は、春からそこでスポーツを専門に学ぶのだということ——

「身体のことは心配しなくていい。過去を振り返る必要もない。君はそこで、ただただ汗を流し勉強に打ち込むといい」

訊きもしないことをつらつら並べた初老の男は、そう締めくくると病室を後にした。私は首をひねって備え付けの鏡を見る。

見知らぬ女性がこちらを覗いていた。

筑波大学体育専門学群に入学してから一年間、際立った問題は発生しなかつた。これが普通の人間なら、肉親を同時に失った悲しみや孤独感、それに事故のフラッシュバックなどのストレスに耐えきれずに発狂していたかもしれない。しかし私は元より両親の顔を知らない。事故の記憶も、その時覚えたはずの恐怖も知らない。事故による後遺症もない（それどころか私の身体能力全般は、体育を専門にするこの学群の中でもトップクラスに位置していた。学友がいた記憶も持っていないため学群では孤立しがちだった。しかし現在の根暗な性格から察するに、記憶を失う前も友人がいなかつた可能性は極めて高いと思われた。

私は記憶を失って、かえってよかつたのかもしれない——
聡志が私の前に姿を現したのは、そんな風に考え始めた矢先だった。

天月君。天月聡志。知識情報図書館学類に在籍し、私の一つ後輩にあたる。私が所属するサークルに入会してきた男の子だ。恋愛経験など無いに等しい私だったが、彼が私に恋心を寄せているということは容易に分かつた。先輩、先輩と駆けてくる彼の表情は喜怒哀楽に富んでいて、分りやすいことこの上ない。私にはないその素直さが眩しく映った。

「それで先輩は、その、探したんですか。…手掛かりとか」

「手掛かり？」

「ええ。記憶を取り戻すための、手掛かり」

私が記憶障害を患っていると知って、なおそのことに触れてきたのは聡志が初めてだった。彼は一瞬目を伏せた後、先のように「手掛かり」という言葉を口にした。

「ほらよく言うでしょう。事故に遭う前の写真を見たら記憶が戻ったとか、以前好きだったスポーツをしたら記憶が戻ったとか、頭に強い衝撃を受けたら記憶が戻ったとか……。あ、先輩、よかつたら僕が先輩の頭に強い衝撃を」

「ありがと。でも遠慮しておくわ」

振りかぶる聡志を制してから、確かに、と私は反芻する。

記憶喪失になった人間に対する処置として、それらはあまりにも基本的である。定石である。にもかかわらず、私はそれらの治療を一切受けていない。

いや、治療のせいにせずとも、自ら進んでそこに向かうことがなかつた。いくら両親死んでいようとも残っているはずだ。その写真や、私が暮らしていた住居や、通っていた学校などが。記憶を取り返す「手掛かり」が。どうして気づかなかつたのだろう。私は驚愕した。

申し出を断られた聡志は残念そうな顔をしながら、やはり「残念」と言った。

「どうですか……。残念。あでも、先輩が手掛かりを探すときは僕のことも連れてってくださいよ。ご迷惑でなければ、ですけど。僕、こう見えてやるときはやる男なんですから。あは」

そうして向けられた屈託のない笑顔に私が好意を向けてしまったのは、これはもう、仕方のないことであると思われた。

次の日から始まった「手掛かり」探し。彼は本当に、どこにでもついてきてくれた。私の実家とされるマンション、私の母校、入院した病院。

依然として分らないことが多かつたが、少しずつわかってきたこともあつた。私の過去には、どうやら「第四学群」という集団が関わっているということ。その集団は、筑波大学地下通路に拠点をもつということ（これらは事実は聡志には伏せておいた）。

結果がはずに終わった日など、私が落ち込んでいると思っ

ているのか、よく聡志が励ましてくれた。「次ですってー」

一年以上も記憶なしで生活してきた身としては、もし記憶が戻らなかつたとしても失うものなどない。落胆のしようがない。しかし彼と一緒にいると、私も自分の過去を知りたい、と思えてくるから不思議なのだった。

私に多くの笑顔を投げてくれた彼は、今、

鉄の扉越しにその身を横たえていた。「おい、そこにいるんだろ。出てきなよ。茜」

——これ以上潜んでいても意味がない。

名指しされてそう判断を下した茜は、赤く錆びついた扉を押して中へと踏み入った。鉄のにおいと埃臭さが鼻をつく。横たわる聡志を視界の端にとらえつつ、言った。「藍さん……といったかしら」

「ごめんなさいね。私、ここ数年物忘れがひどくって……」

あなたのことを思い出せないの。自己紹介お願いできるかしら」

水を向けると、対する彼はマスクの下で表情を歪め、くぐもった笑い声を発した。「物忘れか。そいつは傑作だねー」

「君のことはよく知っているよ、茜。それこそ、世界で一番よく知っているといっても過言ではないね。なんたって君の身体は僕がベースになっているんだから。性格も僕がデザインした」

言いながら、銃口を茜へと向ける藍。

「……生かして帰すつもりはないってことかしら」

「おお。銃を突きつけられても動じないその精神力、流石だね。……いや、当然といふべきかな。君をプログラムする際、『緊張』と『恐怖』の感情を設定しなかったんだから」

「どういふことか」

「おや？ 気づいていないのかい」

藍は心底意外といった様子で目を丸くする。横たわる聡志と茜を交互に見据えた後、ふうん、と言って左手を腰に当てた。

「君はとっくに気が付いていると思ってたけど。どうりでこの坊やと一緒にだって、第四学群がどうのと騒いでたわけだ。……ね、君、本当に何も疑問に思わなかったわけ？ 自分の生い立ちとか、異常な身体力とか。ほら、今だってガスマスクなしに催眠ガスの中で立つてられることかさあ。君を捕えてた連中だって、素手で叩きのめしてきたんでしょ？ 並の戦闘能力じゃないよね」

「……………」

「まつ知らなかったならそれはそれでいいか」

冥途の土産に教えてあげよう。

そう言って藍はマスクを外した。途切れがちな蛍光灯の下、中性的に整った顔があらわになる。茜は息を呑んだ。

無論、その容姿があまりにも自らに似ていることに対して。

「第二次世界大戦、そしてその後続く学生運動、世界各地で止まない暴動や内紛。終わらない混乱の中、日本政府はそれらを鎮圧する力を求めた。そして大学という隠れみのを創設したんだね。ここ筑波大学も多分に漏れることはない。

指導者たる若人を育成する第一学群。

生物兵器を生み出すための第二学群。

工学兵器を生み出すための第三学群。

そして——実際に戦闘を行う部隊としての、第四学群。もちろん第四学群の存在は極秘だった。ほかの学群と違って言い訳のしようがないからね。まさかおおっぴらに軍隊を保持するわけにもいかない。始めは除籍処分になった学生なんかを勧誘して第四学群生を募っていたみたいだけど……」

使えないんだこれが、と笑いを浮かべる藍。茜の後方を顎でしゃくる。おそらく先程茜に倒された第四学群生を指しているのだろう。確かに彼らは武装してはいたものの、身体の使い方や身体能力などにおいては素人同然だった。

「上の連中もようやく気づいたんだろうね。武器や指導者をいくら進化させたところで、肝心の兵隊がグズなうちはどうしようもない、と。だから作ることにした。人間の身体能力

を凌駕した兵隊を。死の恐怖を感じない兵隊を。催眠ガスや毒ガスを体内で分解・無効化する能力を持った兵隊を。……

ここまで言ったら分かったかな？ 神宮茜。君は二〇一三年

現在において大学が唯一、生成に成功した人造人間ホムンクルスなのさ」

生成日時は一昨年の冬だね、と藍は続けた。

「第四学群、なんてものは存在しない。……正確には『まだ』存在していない。人造人間達による、死をも恐れぬ最強の軍隊ができるまではね。しかしだ。現段階で、少し強引に、第四学群というものを定義するのならば——」

第四学群とは、神宮茜。君自身を指すことになる」

遠くで回っている換気扇の羽音が、やけに大きく聞こえた。心なしか鉄さびの臭いも強くなっている気がする。

これも人造人間の力、というやつなのだろうか。

自信にとって衝撃的な事実を突きつけられたにも関わらず冷静を保ってられるのは、どこかでそれを予期していた心と、それから『緊張』『恐怖』を抜かれたというこの感情のおかげだろう。

やるべきことは変わらない。

「尋ねもしないことはたくさんお話しになるのに、私の質問には答えてくださらないのね、藍さん。ねえ。そんな物騒なもの向けられて、私たちはこれからどうなるのかしら」

首をかしげながら、目を伏せてみせる。

藍は銃口をこちらへ向けたまま「そうだなあ」と言った。

「とりあえず君と聡志君の記憶は消させてもらおうかな。と言っても、第四学群に関することだから気にしなくていいよ。君は大事な大事な実験体だからね？ これまで通り、平穏な学校生活を送ってもらわないと。ま、その彼が再三茜をそそのかすようなら、聡志君には消えてもらうことになるけどね？ 幸いこの大学は自殺者が多いから死亡理由

を改ざんするには事欠かな」

銃先が茜からわずかに逸れた瞬間、

「——っ！！」

相手の言葉など最後まで聞かなかった。

素早く腰を落とし藍の懐に飛び込む。とっさに銃弾を放つ藍だったが、間に合うはずもない。銃声が空しくこだまする。茜は素早く相手の背中側に回り込み、銃を持った右手を極めた。

よし、これで——

「ねえ。言わなかったっけ？ 君の性格は僕がプログラミングしたって」

藍の声が、動きが。スローモーションみたいに揺れた。

「君の内面をプログラミングしたときにね、設定したんだ。怒りで我を忘れていた時には相手の右側から回り込むように」

右手を極められている藍の、空いていたはずの左手には、もう一丁の拳銃が握られていた。瞬間、茜の腰で爆音が弾けた。

続けざまに爆ぜた銃声が、僕の意識を連れ戻した。徐々に返ってくる鉄錆びの臭い。体中を襲う鈍痛。ただ、声は出なかった。身体も動かない。

煤けた視界の隅、先輩が腹部から血を流しながら倒れてゆく様を僕は見ていた。

「——ふう、危ない。やっぱり人造人間ホムンクルスの瞬発力は目を見張るものがあるね。侮れないね。まあそうなるように作ったんだから当たり前か」

先輩によく似た男が額の汗をぬぐう仕草を見せた。確か、藍という名前だった。

ホムンクルス？

「彼女の中に『怒り』の感情を残しておくか迷ったけど、残しておいて正解だったね。人間怒ったときには筋力や瞬発力が著しく上昇するものだけど、その分動きが単調になるんだよね。軍隊を組織するときのことを考えると、御しやすいのに越したことはないからね。……さて」

一通りひとりごちた男は足元で痙攣する先輩に目を遣ったのち、右手の拳銃を僕に向けた。

「君のことは本当は生かしておこうと思っただけどね？ 一つ問題があつてさ。茜が君のこと好きみたいなんだよね。恋つてさ、言ってしまうえば精神疾患みたいなものだから、このままだと困るわけさ。さつきみたいにまた暴れられても困るしね？ だから君には消えてもらうことにするよ。いや、もてる男はつらいね？」

微塵も辛そうなそぶりを見せずに言い放つ藍。銃口を突き付けられて、僕の胸に湧き上がってきたのは、しかし恐怖ではなく、先輩への想いだった。

好き？ 誰が？ 誰を？

先輩が、僕を？ そんな。まさか——

「情報学群・知識情報図書館学類、一年、天月聡志。所属サークルは文芸部。大学入学に伴う環境の変化に適応することができず、入水自殺。死体は見つからなかった……」

藍の声が耳を通り抜ける。

先輩、僕も先輩のことが——

たん、と音がして、そして何も見えなくなった。

(おわり)